

民俗博物館だより

Vol.43 No.1

2018. 3. 23



奈良県立大和民俗公園内の移築復原民家（宇陀東山集落）

目次

資料紹介 すき焼き台について	・・・・・・・・・・ 1
ワークシートの改訂と秋季企画展「子ども」を考える1年間―	・・・・・・・・・・ 4
みんなく春夏秋冬 平成 29 年度の活動記録	・・・・・・・・・・ 7

〈資料紹介〉

すき焼き台について

溝邊悠介

昔のくらし関連展「あたたまる道具」

平成29年12月17日(土)～平成30年1月28日(日)の期間で開催した、昔のくらし関連展「あたたまる道具」では、火鉢やコタツ、懐炉などの暖まる道具の他、酒造用具である暖気樽や酒燗器などの温める道具を紹介した。展示資料は、暖まるにも温めるにも、炭火に代表されるように火を扱う道具であり、本展は火を使う道具の移り変わりを紹介するものとなった。その中で、七輪の熱で酒をお燗する酒燗具を備えたすき焼き台を展示した。本稿では、このすき焼き台に注目し、その歴史を紹介する。

実用新案 540 号「実用透焼臺」

今回の「あたたまる道具」展で展示したすき焼き台は、チャブ台の形状をしており、卓の中央に穴があって七輪（コンロ）が仕掛けられるようになったものである。七輪は銅製の箱状で中央の七輪を囲むように水を入れる部屋があり、七輪で炭^{おこ}を熾すとお湯が沸き、すき焼き鍋に火を入れつつ酒をお燗することができる。



写真1 すき焼き台

このすき焼き台には、七輪の部分に特許新案の銘板が取り付けられている。銘板は「大阪／製造／発賣元／特許新案／(五四〇號)／和田竹松」と刻まれており、この番号を特許庁・特許情報プラットフォーム⁽¹⁾で検索すると、明治38年に出願・登録された実用新案第540号の実用透焼臺であることがわかる。番号には、特許発明と実用新案と2つの種類があるが、本資料は銘文にある「特許新案」ではなく、実用新案で登録されている。

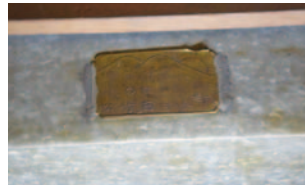
写真2
すき焼き台銘板

写真3 すき焼き台

特許と実用新案の違いは、保護対象が「モノ・方法」であるのか、「形状・構造・組合せ」であるのかという点にある。実用透焼臺についても、組み合わせの出願登録であり、登録請求範囲を、「図面ニ示スカ如キ構成ノ七輪、食卓、銅子、盃臺、銚子筒ヲ組合セタル実用透焼臺」としている。七輪や食卓など既存のものを組合せたものとして登録されており、説明には「中央ニ正方形ノ穴ヲ具ヘ是ニ適當ナル蓋ヲ有シ任意ニ食卓、及ヒ透焼臺トシテ使用為シ得ルノ装置」、「四隅ニ図ニ示ス如キ足四本ヲ有シ第五図ノ点線ニ示ス如ク畳ミ得ルノ装置トス」とある。中央の穴をふさげば通常の食卓として使用でき、食事が終われば脚を折りたたむことができる。いわゆるチャブ台であるが、このアイデアが出願された明治38年において「折りたためる脚を備えた食卓」が既存のものとして示されていることに注目したい。

民俗博物館所蔵のすき焼き台、座敷用コンロ

民俗博物館には実用新案540号の他、「座敷用コンロ」、「丸型お膳」、「すき焼き膳」などの資料がある。座敷用コンロは陶器製の角形七輪が中央にある食卓で、実用新案第540号のように脚は折りたためない。

丸型お膳、すき焼き膳は円形・四角の穴があいてお



写真4 座敷用コンロ

り七輪を据えられるようになっていて、脚は折りたたんで収納できるようになっている。すき焼き膳は四角い穴に実用新案 540 号のような銅製のコンロがはまるようになっている。



写真5
丸形お膳



写真6
すき焼き膳

箱膳からチャブ台へ

すき焼き台や座敷用コンロはチャブ台の形状をしているが、ここでチャブ台について触れておきたい。近世における食卓は、銘々膳と呼ばれる箱膳が主流であった。箱の中に 1 人分の食器が収まり、食事の時に蓋を裏返して食卓とするものである。一般の家庭では同じ部屋で家族そろって食事をするが、箱膳の座順はイエの序列により決まっていた。箱膳、脚付膳の利用から、チャブ台への変化は明治に始まり、「一家団欒」というキーワードのもと大正・昭和初期に全国的に広まったものとみられている。

チャブ台に関する調査研究は国立民族学博物館が 1991 年に詳しく報告している。山口昌伴はチャブ台について「床座式で折りたたみできる脚をそなえた食

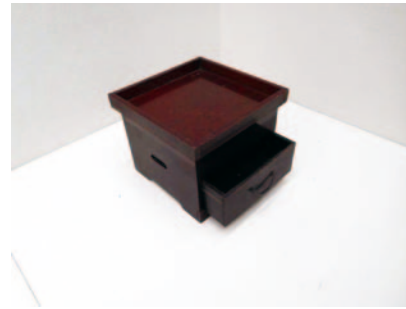


写真7 箱膳

卓”とし、チャブ台の起源や変遷を示すものとして特許資料を挙げ、報告している。報告によると明治 24 年特許第 1188 号の「卓子 (折脚)」がチャブ台の最も古い記載であることを指摘している。第 1188 号という番号の若さから、発明自体は以前からあり、他業者との競合関係から特許制度ができてすぐに特許出願したとみれば、明治 20 年代前後にはチャブ台が登場していたのではないかとの見解を示した。また、同論文の中では食卓・膳に関する特許・実用新案を一覧にしており、出願が大正 10 年以降に急増することから、世間にチャブ台が広まったのも同時期であるとまとめている。ここで紹介される特許は昭和 10 年までで 39 点、実用新案は明治 41 年から昭和 3 年までの計 305 点である。実用新案の採集について「チャブ台普及の進展する時期である明治 40 年から昭和 3 年まで」と述べているので、本稿で紹介する第 540 号は一覧から漏れている。

食卓に関する特許・実用新案の一覧 344 点で七輪やコンロが取り付けられた食卓は、大正 13 年の火鉢掛食臺のみである。第 540 号は特許資料におけるすき焼き台の初出と言えるが、それよりも早く明治 26 年刊行の『東京百事流行案内』にすき焼き台の原型と呼べるものが紹介されている。火鉢の流行形という題で紹介される書院火鉢は、卓の中央に円形の火鉢が組み込まれている形状をしており、「明治以前諸侯向きにて用いられし書院火鉢ハ其形高尚にして手軽の対酌などにハ食卓 (ちゃぶだい) の代用をも做し殊に湯豆腐寄鍋等にハ至極便利あれば偶々骨董屋に出づるも忽ち売切れほど流行するものから今ハ之に代ふるに張貫の角机を用ゆることになりぬ」という説明文が添えられている。もちろん当初は暖房具としてつくられたものであるが、鍋物にちょうど良いという具合で、骨董屋で売り切れるほどの人気であったという。

この史料は食卓に「ちゃぶだい」とふりがなをふっている点が先行研究で注目されたが、すき焼き台の起源を追う上でも重要である。

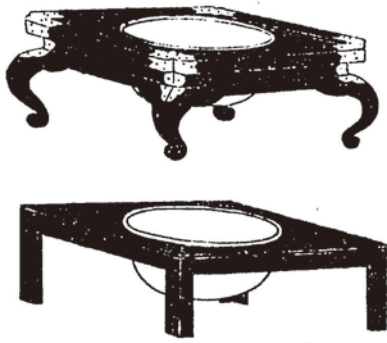


写真 8
『東京百事流行案内』
書院火鉢図
*『食卓文明論-チャブ台はどこへ消えた?』P156より引用

明治以降の牛肉食文化と食卓の変化

「すき焼き台」という名の通り、家族で鍋を囲んですき焼きを食べるわけだが、日本で牛肉を食べようになったのはいつ頃かという、やはりこれも明治からである。近世から薬喰くすりぐいなどのように獣肉を食べる風習は一部あったが、一般に食されるのは「牡丹」「紅葉」と呼ばれる猪や鹿の類であった。普段の食事としては米飯、野菜、魚が中心であり、明治初期に日本各地を旅行した外国人日記からも当時の日本の食事風景を窺い知ることができる。明治 11 (1878) 年に東京～北海道を旅行したイザベラ・バードは、「保養地のホテルを除いては、パン、バター、ミルク、肉、鶏肉、コーヒー、葡萄酒、ビールが手に入らず、米飯や茶、卵を常食としなければならない。日本食というのは魚と野菜の料理」という風に記録を残している。また、明治 10 (1877) 年に研究で日本へやってきたエドワード・S. モースは市場の魚類の多さや、魚の生食(刺身)について記している。唯一肉食の例を挙げているのが鶏肉で、四角いブリキをかまどに置き、その上で鶏肉を焼いている図を写生している。

明治になり牛肉消費を盛んにした料理としては、牛鍋が挙げられる。明治 4 年に仮名垣魯文が著した『安愚楽鍋』は当時の牛鍋屋を題材に作品にしたもので、牛鍋は西洋文化の移入、文明開化の象徴として扱われた。『安愚楽鍋』に登場する挿絵には、散切り頭の客が牛鍋を食べるシーンがあり、散切り頭と牛鍋が文明開化の解説として教科書にも用いられる。どの挿絵をみても一人用の箱火鉢状のコンロの上に鍋を置き飲食している絵が描かれている。鍋以外の食器は火鉢脇の膳にのり、一つの食卓になっていない。

牛鍋は文学にも登場し、明治 43 年に発表された森鷗外の「牛鍋」では三人の男女が鍋を囲んで牛鍋を食べる様子を作品にしている。一人用の鍋ではないことは確かだが、鍋が卓上になったものかどうかは残

念ながら判別つかない。

すき焼きを含めた牛肉食文化のはじまり、明治以降の食文化の変化について、柳田国男は『明治大正史一世相篇』の小鍋立と鍋料理の項で触れている。「明治以降の日本の食物は、略々三つの著しい傾向を示して居ることは争えない。その一つは温かいものゝ多くなったなつたこと、二つには柔らかいものゝ好まるるやうになつたこと、其三には即ち何人も心付くやうに、概して食ふものゝ甘くなつて来たことである」「現在の実状に於ては、小鍋の利用にかけては我々は先づ世界無類である。或は日本料理を言ふと直ちに所謂鋤焼の美を喋々する者も多いが、是は勿論牛雞の食用が、此頃始まつたことも知らぬ様な、西洋の半可通に調子を合せた言葉である。(中略)是が僅々五六十年内の発明であり、又普及であることを信じ得ない者の多いのは、寧ろ自然といふべきである。」「兎に角に、人が温かいものを喜ぶ風は、最初から今のやうに濃厚で無く、中頃酒茶の常用に誘導せられて、特にふうふうと吹いて食ふやうなものを、御馳走と感ずるやうになつたらしいのである。」

柳田は、明治以降から温かいもの、柔らかいもの、甘いものが好まれるようになり、日本料理といえはすき焼きであるとする当時の人々の意識があり、これが 50～60 年ほどの発明であることを知らない人が多いと述べている。また、鍋料理を代表とする温かい料理の広まりについて、炉の分裂を挙げている。かまどや囲炉裏の火こそ荒神様の神聖な火であり、この火によって調理されないものは口にしないという信仰が、昭和初期に近い時期まで残されていたという。

牛肉を食べることは西洋化の象徴として始まるが、その調理法として鍋物という新しい料理が選ばれた。座敷で直接火を使って料理し食べる行為が明治以降に広まったことが書院火鉢の流行からも窺い知れる。

おわりに

特許資料はそこに記されるアイデアや発想がその時代にあったことを証明するが、その発想が実現したものかどうかははっきりせず、史料価値は少ないものとされてきた。その点、民俗資料にみられる特許・実用新案番号からは、特許資料にみられるアイデアや発想が確実に具現化され、世に出されたものとわかる。

すき焼き台は七輪を備える食卓として特殊なもの・チャブ台の発展形と思われがちだが、実用新案の登録年も古く、チャブ台の普及と深いつながりがある。む

しろチャブ台の普及にすき焼き台が一役買ったとみる
ことができるのではないか。起源と思われる明治 24
年のチャブ台とほぼ同時期に火鉢の流行形として書院
火鉢が紹介され、骨董屋にあるような書院火鉢が鍋物
の流行により注目された背景からも読み取れる。

すき焼き台は、温かい食事の広まり、牛肉の広まり、
炭火の発達、一家団欒などの要因から生まれた食卓で
あり、明治大正期の食・住環境を表す格好の資料では
ないだろうか。

脚注

(1) 特許庁特許情報プラットフォーム J-Plat-Pat

(<https://www.j-platpat.inpit.go.jp/web/all/top/>
BTmTopPage)

参考文献

大川新吉『東京百事流行案内』1893 (国立国会図書館デジタル
コレクション)

藤澤衛彦『明治風俗史』春陽堂、1929

森鷗外『森鷗外小説全集』第 2 巻、寶文館、1957

柳田国男『明治大正史―世相篇―』東洋文庫、平凡社、1967

E.S. モース『日本その日その日』東洋文庫、平凡社、1970

宮本馨太郎『めし・みそ・はし・わん』岩崎美術社、1973

芳井敬郎「食卓生活史の質的分析 (その 1) - 食事空間と食卓・
食器 -」『国立民族学博物館研究報告別冊』16 号、国立民族学
博物館、1991

山口昌伴「チャブ台の正体―その姿と形の変遷とその意味―」

『国立民族学博物館研究報告別冊』16 号、国立民族学博物館、
1991

イザベラ・バード『日本奥地紀行』平凡社ライブラリー、平凡社、
2000

坂井健「牛鍋はどんな鍋だったか―『安愚楽鍋』を中心に―」『京
都語文第 9 号』仏教大学国語国文学会、2002

坪内祐三・ねじめ正一『明治の文学第 1 巻 仮名垣魯文』筑摩書
房、2002

福田育弘「構造としての飲食 魯文の『安愚楽鍋』から鷗外の「牛
鍋」へ」『学術研究 (外国語・外国文学編)』早稲田大学教育学部、
2005

石毛直道『食卓文明論―チャブ台はどこへ消えた?』中央公論
新社、2005

松尾雄二「文献にみる牛鍋とスキ焼きの歴史について」『畜産の
研究』69 巻 9 号、養賢堂、2015

『発明に見る日本の生活文化史家具シリーズ第 1 巻机』株式会社
ネオテクノロジー、2015

ワークシートの改訂と秋季企画展 ―「子ども」を考える 1 年間―

茶谷まりえ

(1) はじめに

今年度、民俗博物館では「子ども」が大きなキーワ
ードの一つになったと感じる。年間を通しておこなっ
ている様々なワークショップや小学生向けプログラムに
加え、小学校の団体見学が集中する秋にかけておこ
なった 3 種類の教材の改訂、そして私自身にとっては
秋季企画展「子どものくらし―あそびとまなび―」を
担当したことは「子ども」に向き合う最も大きな機会
になった。

本稿では、これらの取り組みを通して得られた成果
と問題点をふり返るとともに、今後の活動へのステッ
プとしたい。

(2) 新教材のリニューアル

昨年度の常設展「昔のくらし」のリニューアルに続
き、今年度はワークシートの全面改訂をおこなった。
前身となった教材の分析と昨年までの経験を踏まえて
意識したのは“子どもの視点”と“子どもへの視点”、

つまり教材を使用する子ども自身と彼らを支える周り
(教員・保護者・学芸員など) の視点である。楽しんで
取り組める工夫や利便性はもちろんだが、子どもたち
と対話したり学びを深めるための声掛けをしやすいよ
うな「遊び」の部分が必要だと考えたのである。また、
それに伴い展示の充実や補足パネルの設置などをおこ



3 種類の新教材



ワークシートに取り組む児童

ない、展示と教材が相互に補い合える形を模索した。

そういった試行錯誤の末、9月にデビューした新教材「みんな探検！」(3年生向き/クイズ式)、「民俗博物館ワークシート」(4年生向き/書き込み式)、「常設展「昔の暮らし」解説&活用アイディアブック」は、発達段階や学習計画に応じて使い分けたり組み合わせたりできるセミオーダー式。県内の全小学校への送付に加え、自由にレイアウトを変えられるように博物館のホームページでもデータをダウンロードできるようにした。利便性・有用性の追求はもちろんだが、教員にとっても楽しみながら主体的に取り組めるものであり、博物館全体をひとつの教材として活用してもらえようことを心かけた。その結果、以前のワークシートに比べて利用率が上がり、単に利用するだけでなく独自の要素を加えたワークシートを持参するケースが多く見られた。また、教材の取り入れ方を通して教員と学芸員のコミュニケーションにもつながったと考える。

しかしながら、実践を通して気づいた改善点・反省点は多く、より利用者の目線に立った見直しが必要だと感じた。実践のなかで私が最も驚かされたのは、子どもの好奇心と視界である。例えば、小学3年生は「昔の暮らし」展示室の見学が中心になることが多いため、使用する教材も同展示室を中心に使用されることを想定している。しかし、自由記述やスケッチのページでは特に好奇心が広がり、行動範囲は館内全域に及ぶ。「他の人と違う珍しいものを選びたい」というのも子どもらしい発想なのかも知れない。しかし、使用年代や読み仮名などを書いた小学生向けの補足パネルを全ての資料に取り付けることは難しい。一方で、そういったパネルを資料の後ろに設置していても、目の前にある資料に目が行ってパネルとの関係性に気がつかないという場合も珍しくない。このような子どもならではの

の性質を受け止めて学びを引き出すためには、やはり周囲の声掛けが不可欠なのである。博物館のあり方を考える上でワークシートの是非が問われることは多々あり、博物館や学校の怠慢とする意見もある。しかし、効果的にワークシートを取り入れるためには、むしろよりきめ細かな対応が求められる場合もある。新教材をどのように活かしていくかは、今後の大きな課題の一つである。

(3) 秋季企画展「子どもの暮らし」

ワークシートの改訂における経験や考えを踏まえ、秋季企画展を担当する中で「子ども」というものがどのような存在なのかということを考えて。また、同展の会期がちょうど小学校の団体見学の時期であるということもあり、いかに子どもたちの関心を惹きつけるかということも大きな課題であった。その中で浮かんだのが“イメージの共有”である。そこで、学習に関する資料を紹介するコーナーでは子どもたちにとって馴染み深い教科書や昔話にまつわる道具に焦点をあてることにした。例えば、『かちかち山』の背負子と火打ち石、『ぶんぶく茶釜』の茶釜、『舌切りすずめ』の葛籠、『笠地蔵』の蓑と笠などに加え、昔話でしばしば見られる照明器具や防寒着などの生活用品を展示した。また、小学校1年生の国語科の教科書に登場する定番の物語『たぬきの糸車』や4年生の国語科で学習される『ごんぎつね』といった現代の教科書でも広く親しまれる物語を例に挙げ、猟銃や魚籠、糸車の展示をおこなった。期待通り、子どもたちは「絵本で読んだことある!」「教科書で見た!」と目を輝かせて展示ケースをのぞき込み、熱心にメモやスケッチをしていた。物語のイメージを共有することで、簡単な解説文でもその道具が使



糸車をスケッチする児童

われている様子が伝わりやすくなり興味が湧いたものと推察される。

もちろん、昔話や教科書に登場する物語は創作要素が多く含まれ、時代や地域の設定にも慎重な検証が必要である。しかしながら、子どもたちにとって「見たことがある」「聞いたことがある」というのは、かけがえない学びのきっかけになると言える。また、大人でも「なつかしい」と目を細めたり「自分の時代はこうだった」と思い出話に花を咲かせる方の姿も多く見られた。

また、同展では「みんなでつくろう！ボクのワタシのあそび図鑑」と称して展示室の壁面をアンケート形式の参加型展示にした。子どもには今、大人には子どもの頃に好きだった玩具や遊びを尋ねるアンケート用紙を用意し、展示室の壁に貼ってもらって1つの大きな作品を作り上げるというもので、“子ども”という共通の時間軸の上で「書く」「見る・読む」という間接的な対話を能動的に楽しんでもらおうという狙いである。最終的に80名を超える参加があったことも驚きだったが、現在の小学生が予想以上に古風な遊び（けん玉やお手玉など）を好んでいることがわかった。これは何物にも代えがたい説得力があり、今の子どもたちの姿が垣間見られる。



「ボクのワタシのあそび図鑑」(参加型展示)

(4) 教科書にみる暮らしと子どもたち

秋季企画展では、約60年前の教科書を多数展示した。そこには当時の生活、そして子どもたちの様子が生き生きと描かれている。例えば、登場人物の髪型や服装をはじめとした衣食住にかかわるものの他、4年生の理科や社会科では火鉢の中の炭の燃え方に関する兄妹の会話やおつかいで炭屋へ炭を買いに行く少女が描かれており、5年生の家庭科では日本家屋の掃除方法や道具の作り方、算数では「合」や「斗」といった昔の

単位を用いた桁や瓶などによる計算問題が出るなど当時の人々の暮らしと感覚、その時代の空気感が色濃く表れている。今の生活では考えられないようなエピソードがしばしば見られるが、その時代においては当たり前前の光景であり、子どもたちにとってもありふれた日常のワンシーンであったのだろう。秋季企画展では、「火をつかう道具」「掃除する道具」「はかる道具」を中心に教科書とその中に登場する道具を並べて展示し、当時の空気ごと伝えることを試みた。従来の役割を終えてもなお、教科書は時代を超えて私たちに様々なことを教えてくれる。

(5) おわりに

これまで書いてきたように、今年度はあらゆる場面で「子ども」に向き合う一年間だった。また、そういった中で先生方から学校での学習のあり方や悩みを耳にする機会も少なくなかった。特に印象的だったのが、「どのように博物館(資料)を利用すれば良いかわからない」というものである。中でも、多くの小学校で採用されている国語科の教科書で『たぬきの糸車』という物語が親しまれていることは前述の通りだが、作中で特徴的なのが糸車の“キーカラカラ、キークルクル”という擬音である。実際の使用音に近いかどうかという点に関しては様々な意見があるが、馴染みの薄い道具が使われ絵る様子や音をイメージするのは非常に難しいはずである。教科書では挿絵も少なく、当然ながら糸ができて上がっていく工程もほとんど描かれていない。毎年、数件の小学校から糸車の貸し出し依頼を受けるが、当然ながら教員もその使い方が詳しくは理解できておらず見せるだけで終わってしまう場合が多いという。綿の生育から綿繰り、綿打ち、そして糸車で糸をつむぎへと工程を経る一連の流れをつかみ、さらに音や触感といった実際に体験して初めてわかる要素が加わることで、道具への理解はぐっと深まる。しかしながら、限られた時間の中ではなかなかそこまで掘り下げた授業はできないというのが現状のようだ。

今年度、博物館では綿繰り機や糸車を使った糸作り体験の他、炭を燃料にして火を使う道具や昔の掃除のワークショップなども開催し、以前に比べて教材も充実した。しかし、まだまだたくさんの可能性が埋まっていることも実感した。博物館では家庭や学校ではできない経験ができる。博物館そのものが一つの“教材”になり、今後さらに活用されていくように尽力していきたい。

みんなく春夏秋冬

平成 29 年度の活動報告

【展示】

1. 企画展

- ・ 5月2日(火)～6月25日(日)
 春季企画展「モノとくらしのデザイナー—かたち—」
 道具やくらしのデザインに焦点をあて、2季連続の企画展として開催。春季は、さまざまな道具を「かたち」という観点から考えた。(2,666名)
- ・ 7月15日(土)～9月3日(日)
 夏季企画展「モノとくらしのデザイナー—しくみとはたらき—」
 モノとくらしのデザイン第2弾の企画展。昔の道具の「しくみ」や、道具がこなす「はたらき」、また生活の中で影響し合う「はたらき」など、様々な観点から収蔵資料を紹介。(1,395名)
- ・ 10月7日(土)～11月26日(日)
 秋季企画展「子どものくらし—あそびとまなび—」
 博物館が所蔵する昭和初期の教科書やおもちゃ、また現代の子どもたちも接する身近な物語に登場する道具などを展示。子どもたちのくらしの「昔」と「今」を考えた。(4,696名)
- ・ 12月16日(土)～平成30年1月28日(日)
 昔のくらし関連展「あたたまる道具」
 「あたたまる道具」「あたためる道具」にスポットをあて、昔のくらしを紹介する。日常生活で必要な暖房器具や防寒具の紹介のほか、酒造りでの暖気樽の利用や、養蚕で用いられる養蚕火鉢などを通して、冬に行われた生業も紹介。(1,618名)
- ・ 平成30年2月24日(土)～3月25日(日)
 季節展「ひなまつり—人形たちの宴—」
 平成14年度、玄関ロビー展として始まり、17年度から企画展示室に場所を移して本年度で13回目を数えるこの時期の恒例展。昨年度末に寄贈を受けた初出品資料1組を含め、当館が所蔵する雛人形、雛道具を一堂に展示。

2. コーナー展

展示室通路の一角を利用し、常設展・企画展を補完する内容や季節に因んだテーマ、当館が現在取り組んでいる活動や新収蔵品について展示紹介(5催)。

- ・ 4月22日(土)～6月18日(日)
 「型—かたちをつくるかたち—」
 和菓子や玩具、うちわの型紙などいろいろなモノをつくる「型」を紹介。多種多様なデザインや材質から日本人の感性とモノづくりの関係に迫った。
 - ・ 7月1日(土)～30日(日)
 「涼む」
 うちわやかき氷機、蚊やり豚、陶枕、ガラスの器など、暑い夏を涼しく暮らすための道具と知恵が集合!目で、耳で“涼”を感じる季節展示。
 - ・ 8月5日(土)～8月27日(日)
 「戦時下のくらし」
 当館8月の恒例展。時の人々が実際に使用したものを通して暮らしの視点から戦争と平和について考える。当昨年度寄贈を受けた「戦時国債」に加え、代表的なコレクションとして「戦争体験文庫」を有する奈良県立図書情報館との連携協力で、展示、関連催しをより充実。
 - ・ 9月23日(土)～11月19日(日)
 「旅する郷土玩具」
 人の手から手、場所から場所、時代から時代へと“旅”しながら受け継がれてきた郷土玩具の魅力を紹介。張り子作家として活躍する竹田周平氏との連携協力で作品や製作工程を紹介。
 - ・ 12月9日(土)～平成30年2月25日(日)
 重要有形民俗文化財公開
 「木を活かす技—吉野の林産加工用具—」
 奈良県立民俗博物館所蔵重要有形民俗文化財「吉野林業と林産加工用具」の中から、木地細工(椀、曲物、杓子等)、樽丸(桶、樽の材料)、箸作りなど林産加工用具のエッセンスを展示。
- #### 3. 玄関ホール展
- 博物館のエントランス空間を利用して市民との連携を図る催しを実施。
- ・ 9月10日(日)～24日(日)

「大和ミツバチの不思議な生態」

ニホンミツバチを通じて森の環境を考える会「ビ
ーフォレスト・クラブ」によるパネル展。

・10月28日(土)～12月17日(日)

写真展「私がとらえた大和の民俗―水―」

共催：奈良民俗写真の会

奈良の民俗行事・風景を題材とする競作展。「人生
の水」(志岐利恵子)、「水の風景」(鹿谷勲)、「水
の信仰」(脇坂実希)、「水垢離」(野本暉房)、「流
す」(松本純一)、「めぐみの水」(森川壽美三)、
「大岩の雨たんもれ」(田中真人)、「暮らしと水」
(森川光章)、「災害」(野口文男)、「請堤(受堤)」
(松井良浩)、の各テーマで写真家が3点ずつ出品。

【催し物】

1. ワークショップ・体験学習

・4月29日(土・祝)

「里山のクラフト―自然のかたちであそぼう―」
いろいろな木の端材や枝、木の実、葉っぱなど自
然素材を使った工作ワークショップ。(12名)

・5月3日(水・祝)～5月5日(金・祝)

「子どもの日ワークショップまつり」

「子どもの日おはなし会」

協力：矢田の里たけのこクラブ

朗読の会 陽だまり

竹やフェルトを使った工作や親子で楽しめる物語
や絵本の朗読会、昔の道具クイズ、けん玉やメン
コなどなつかし遊びの体験コーナーも。(359名)

・5月14日(日)

「国際博物館の日」記念ワークショップ

「みて、きいて、ふれる民具のデザイン」

普段は展示でみるだけの資料を実際に動かし、道
具のしくみや音を体感していただいた。(19名)

・6月11日(日)

「和菓子の型で石鹼づくり

―和のデザインと季節をたのしむ―」

協力：株式会社 本家 菊屋

ケンシヨク「食」資料室

コーナー展「型」の関連ワークショップ。和菓子
の木型や明治～昭和初期のデザイン帖などを参考
に、シリコン製の型を使ってオリジナル石鹼をデ
ザイン、製作した。(35名)

・7月30日(日)

「夏の古民家体験&ミニ植木鉢の風鈴づくり」

夏のくらしを楽しむワークショップ。民俗公園内
の古民家での蚊帳を体験したあと、小さな植木鉢
を使いカラフルで可愛い風鈴作りを体験。(58名)

・8月5日(土)

「絵本と紙芝居で聞く戦争と平和のおはなし」

協力：朗読の会 陽だまり

奈良県立図書情報館

河合町立図書館

コーナー展「戦時下のくらし」の関連催し。『ちい
ちゃんのかげおくり』などの世代を超えて知られて
いる物語から比較的近年に描かれた『さくら』、さ
らに本年は大淀町在住の市民が平和への願いを題材
に製作した紙芝居を行った。

・8月6日(日)

「つくろう！あそぼう！竹の楽器とおもちゃ」

協力：矢田の里たけのこクラブ

竹の特徴や加工の方法を教わりながら、竹や木の
実などの自然素材やペットボトル、画用紙など身
近な材料で楽器や動く玩具を作った。(32名)

・8月27日(日)

「夏の古民家体験&ミニ扇風機づくり」

講師：奈良工業高等専門学校電気工学科助教授 池田陽紀氏

共催：奈良工業高等専門学校

歴史と科学を同時に楽しめるワークショップ。暑
い夏を快適に過ごす古民家の工夫を見学し、昔の
人力式扇風機をまわす体験をしたあと、モーター
から手作りするミニ扇風機作りを体験。(19名)

・9月18日(月・祝)

「民俗公園でミツバチ巣箱と自然観察会&大和ミツ
バチ巣箱作り体験ワークショップ」

ビーフォレストクラブ、大和ミツバチ研究所との
共催事業。(12名)

- ・10月8日(日)
「秋の古民家で聞くおはなしの散歩道&かまど体験」
協力：朗読の会 陽だまり
江戸時代の古民家・旧臼井家住宅を会場に、かまどでお湯を沸かしてあたたかい大和茶を味わい、火吹き竹や薪入れを体験。昼からは、火やかまどにちなんだ昔話と季節の物語を楽しめる朗読会を開催。(30名)
- ・10月22日(日)
「はじめての張り子」
講師：竹田周平氏
コーナー展「旅する郷土玩具」の関連ワークショップ。展示室で作品を見ながら従来の張り子との製作方法の違いなどについての解説の後、予め当館所蔵の鹿張り子の型から3Dプリンターやスキャナーなどで複製した型を使って作られた張り子のベースに参加者が各自絵付けしました。(11名)
- ・11月25日(土)
「昔のあかり体験&朗読『モチモチの木』」
協力：朗読の会 陽だまり
普段は体験することができない夜の古民家を体験。行灯や燭台など昔の照明を博物館で見て触ったあと、大和民俗公園内の古民家・旧臼井家住宅で昔の家の明るさ、暗さを体験しながら『モチモチの木』の朗読を楽しむイベント。(26名)
- ・12月3日(日)
「写真家座談会—水に関する奈良の民俗—」
主催：奈良民俗写真の会、奈良県立民俗博物館
玄関ホール写真展の関連イベント。大和民俗公園内の旧臼井家住宅で写真作品を紹介しながら、作品を写真家自ら解説。(20名)
- ・12月17日(日)
「吉野の木にふれる—上映会&祝い箸づくり—」
講師：岡本順子氏
協力：奈良県立教育研究所
コーナー展「木を活かす技—吉野の林産加工用具—」の関連イベント。吉野林業の歴史と割り箸づくりについての映像上映と、吉野町で割箸製造業に長年携わっておられる岡本順子氏のお話と指導により、お正月にぴったりなペアの祝い箸をつくるワークショップ。(14名)
- ・12月23日(土・祝)
「冬の古民家でお掃除体験」
昔ながらの道具と方法で江戸時代の民家を大掃除！畳の掃き掃除、板の間の拭き掃除、布のはぎれではたきを作り、使ってみる催し。(40名)
- ・12月24日(日)
「里山のお正月かざり」
束ねた水引に、松ぼっくりや松の葉、クロガネモチ、ナンテン、ワタなどを飾り、自然の形や色を楽しみながら世界に一つだけの輪飾りを製作。(44名)
- ・平成30年1月8日(月・祝)
「体験！火をつかう道具&新春お正月あそび」
協力：矢田の里たけのこクラブ
独楽や羽つき、かるた、紙相撲など定番のあそび、凧や竹ぼっくりなどの手作り教室を開催。
あわせて「あたたまる道具」展の関連イベント、火を使う道具のワークショップも開催。かまどや七輪での火おこし、炭火アイロン、回転ごたつ等の昔の暖房器具、和ろうそくで昔のあかり体験も。(120名)
- ・1月14日(日)
「炭火アイロン体験&アイロンビーズ工作」
昔のアイロンと今の道具との違いを体験から考える。炭火アイロンを体験したあと、現代のアイロンを使って小物づくりを楽しんだ。(48名)
- ・2月17日(土)・18日(日)
「春の子どもワークショップまつり」
協力 矢田の里たけのこクラブ
紙芝居工房・漣(あっぱれ)
「古民家でひなまつり」のオープニングイベント。竹のおひなさま作り、和菓子石鹸作り、アイロンフェルトのトートバッグ作り、レトロ紙芝居、クイズラリーなど様々なプログラムで構成。(210名)
- ・2月25日(日)
「糸作り体験&朗読『たぬきの糸車』」
協力 澤田絹子氏
朗読の会 陽だまり

小学1年生の国語の教科書でも紹介される『たぬきの糸車』の朗読を聞いた後、綿繰り器、綿打ち弓、糸車を使って木綿糸作りを体験。(体験参加者15名、見学12名)

・3月3日(土)

「早春おはなし会—おひなさまの前で—」

協力：朗読の会 陽だまり

旧臼井家住宅に飾られたお雛様を囲んでこの季節にちなんだ「ひなまつり・上巳の節句」、「ももこのひなまつり」ほか2編を朗読。(50名)

・3月25日(日)

「かまどご飯でおむすびをつくろう」

かまどを使ってご飯を炊き、自らの手でおむすびを作る催し。ご飯を炊く音や香りを実感。ご飯が炊ける間、わらの手ぼうき作りの体験も。(10名)

【連続講座】

「大和機で麻布を織る」

期間：平成29年4月～平成30年3月(月2回)

指導：澤田絹子氏

江戸時代、奈良晒の原料として用いられた苧麻(カラムシ)の繊維を用い、当時と同タイプの紡織用具で幅25cm×長さ30cmの布作りに挑戦。

苧麻の繊維を取り出しや糸作り、大和機に糸をかけて織るまでを体験した。

【機織りの実演】

協力：澤田絹子氏

平成24年秋から実施。展示室または2階講義室で機織りとその関連作業を見学できます。説明や質問も随時受け付け。(17回実施)

【学校・博物館等との連携・協力】

1. 大学との連携(連携協力に関する協定締結)

(1) 新規

京都造形芸術大学との有形民俗資料の保存・継承、活用に関する教育研究活動についての相互協力

【概要】

○目的

博物館の特色を活かし、大学における教育研究活動の円滑な実施と人材育成に寄与することを目的

とし、有形民俗資料の保存・継承、活用についての情報交換、その研究、実践において相互協力する。

○内容

- ・民俗博物館が所蔵する有形民俗資料を教材として提供し、京都造形芸術大学の授業において、その取り扱い、修復の実習を行う。
- ・同大学の学生が行う調査・研究活動、論文作成などにおける民俗博物館所蔵資料の活用について、博物館が支援・協力をを行う。
- ・民俗博物館が所蔵する資料の修復が行われることで、劣化、滅失の恐れのある貴重な文化財が救われ、展示や体験学習等での活用を可能にする。

本年度は、京都造形芸術大学芸術学部歴史遺産学科の学生が伊達仁美教授の指導のもとに当館学芸員とともに選んだ灯火具、農具、染織用具、商用具等13点について、資料調書の作成、クリーニング、防錆処理、虫害部分の教科処理などを行い、その成果は、同校の学園祭で展示・発表されました。当館でも平成30年度、その成果を展示公開予定。

(2) 継続(平成23年度に協定締結)

帝塚山大学大学院人文科学研究科日本伝統文化専攻後期博士課程在籍者のインターンシップ受け入れ。(平成29年度については希望者なし)

2. 展示解説・出張授業等

(1) 小中学校の団体見学 61校

- ・学芸員による展示解説 31校
- ・フロアサポーター 3校

利用時間内に展示室に学芸員、ボランティアが展示室で適宜、展示資料や体験コーナーでのレクチャー、質問対応などを行うサービス。

(2) 臨地講義・講師派遣等(高等学校、大学、一般)

- ・4月5日(水) 臨地見学
奈良文化女子短期大学児童教育学科(65名)
- ・4月19日(水) 臨地見学
奈良県立西の京高等学校地域創生コース(45名)
- ・5月13日(土) 講師派遣
奈良学園大学奈良文化女子短期大学部(60名)
- ・5月14日(日) 博物館学見学実習
奈良大学 通信教育部(51名)
- ・5月20日(土) 臨地見学

- 奈良大学 文学部文化財学科 (22名)
- ・5月20日(土) 漢師派遣
都祁郷土会 (40名)
- ・6月2日(金) 臨地見学
奈良県立法隆寺国際高校 (41名)
- ・6月3日(土) 臨地見学
帝塚山大学文学部文化創造学科 (16名)
- ・6月9日(金) 臨地見学
天理大学 文学部歴史文化学科 (15名)
- ・6月17日(金) 講師派遣 *連携協力協定
京都造形芸術大学 歴史遺産学科 (14名)
- ・8月25日(金)
天理大学 文学部歴史文化学科 (6名)
- ・9月21日(木)
奈良東養護学校 高等部 (33名)
- ・12月10日(日) 講師派遣
奈良市教育委員会 文化財課 (8名)
- ・平成30年1月26日(金) 講師派遣
適応指導教室 すみれ教室 (7名)

3. 博物館実習・インターンシップ

- ・8月8日(火)～12日(土)
和歌山大学 (1名) 博物館実習
- ・11月15日(水)～17日(金)
奈良市立富雄南中学校 (2名) 職業体験学習

4. 有形民俗資料、無形民俗資料記録資料の貸出

- ・大和の伝承記録映像『土臼(モミスリ臼)の修理』
1点 [調査・研究] 元興寺文化財研究所
- ・小倉百人一首かるた4点 [展示] 橿原市立図書館
(第32回国文祭「小倉百人一首競技かるた大会」PR展示)
- ・綱貫(猪皮、牛皮)2点 [展示] 船松人権歴史館
(企画展「塩穴村と綱貫・太鼓」)
- ・綿繰機2点、糸車2点、綿打弓1点 [教材]
生駒市教育支援施設適応障害指導教室いきいきホットルーム
- ・囲炉裏用自在鉤、囲炉裏用五徳各1点 [映画撮影]
有限会社 組画(映画「ビジョン」制作)
- ・寄贈戦時国債427点 [展示] *連携協力事業
奈良県立図書情報館(『第48回戦争体験文庫資料
展示 民博所蔵「戦時債券」の世界』)
- ・寺子屋、近代学校教育関係資料等45点 [展示]
葛城市歴史博物館(冬季企画展「思い出の学校」)
- ・農耕関係写真資料54点 [展示] 国立民族学博物
館(特別展「太陽の塔からみんぱくへ」)

- ・火熨斗1点 [教材] 奈良市立伏見小学校
- ・糸車1点 [教材] 大和郡山市立治道小学校
- ・糸車1点 [教材] 奈良学園小学校

5. 資料の特別閲覧・写真撮影、画像資料提供など

※展示の予備調査等は除く

- ・葉袋版木5点 [特別閲覧] 個人(研究)
- ・改良高機 [特別閲覧 実測調査] 個人(研究)
- ・収蔵庫内資料 [特別閲覧] *連携協力
京都造形芸術大学歴史遺産学科(臨地講義)
- ・改良高機 [画像資料使用許可] 個人(研究)
- ・『展示あんない』所載イラスト7点 [画像提供]
(有)くるみの木(奈良町南観光案内所パネル展示)
- ・牛耕風景、田植え風景3点 [画像提供]
IVS テレビ製作株式会社(TV資料映像)
- ・収蔵庫内資料閲覧 [特別閲覧] *連携協力
帝塚山大学文学部日本文化学科(臨地講義)
- ・犁使用風景写真1点 [画像提供]
枚方市教育委員会(展示、印刷物作成)
- ・大和緋関係資料5点 [画像提供]
生駒市図書館南分館(講演会資料掲載、パネル展示)
- ・金魚養魚関係資料 [特別閲覧] 個人(研究)
- ・田植なわ、がんつめ、万能くわ [転載]
株式会社文溪堂(子供に伝えたい和の技術シリー
ズ『米づくり』)
- ・旧鹿沼家住宅外観 [画像提供] 株式会社アッシュ
(「隔週刊 必殺仕事人 DVDコレクション73号」)
- ・千歯扱き [転載] 株式会社ジャストシステム(通
信教育サービス「スマイルゼミ中学生コース」)
- ・旧鹿沼家住宅外観、竈使用風景、平面図 [転載]
明石市市民生活局文化振興課(明石市立文化博物
館企画展「くらしのうつりかわり展-家事のさし
すせそー」展示パネル、図録掲載)
- ・水車、長床犁、備中鋏、千歯扱き、唐箕 [転載]
株式会社朝日新聞出版(歴史漫画タイムワープシ
リーズ「江戸時代へタイムワープ」、同電子出版)

奈良県立民俗博物館だより Vol.43 No.1 (通巻 109号)
2018(平成30)年3月23日発行
編集発行 奈良県立民俗博物館
〒639-1058 大和郡山市矢田町545番地
Tel0743-53-3171 / Fax0743-53-3173
印刷 株式会社アイプリコム
〒636-0246 磯城郡田原本町千代360-1
Tel0744-34-3030 / Fax0744-34-3040